
瞬間 パラレル

珈琲ミルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞬間 パラレル

【Nコード】

N6648N

【作者名】

珈琲ミルク

【あらすじ】

先祖代々受け継がれた首飾り！！首飾りの不思議な力によって運命は大きく廻りだす！！

プロローグ

「いいか？未来、この首飾りは先祖代々受け継がれたとても大切なモノなのだぞ」

五歳の誕生日じいちゃんがオレに誕生日プレゼントとしてオレにくれた。「うん！この白い石キレイだね！？」

「そうだろ。なんたってこの石は…未来に説明するのはまだはいか」

じいちゃんはこの時、説明するのをやめた。

「どれ未来、首飾りをつけてやろう。向こう向いてごらん」

「うん」

じいちゃんはオレに首飾りをつけてくれた。白く輝く石はとてもキレイに見えた。

「この首飾りはお前を幸せにしてくれるぞ」

この時オレはこの首飾りがオレの運命を大きく変えるなんて思ってもいなかった。

第1話：光

キンコンカンコン

「今日の授業はここまで。」

「「「ありがとうございます」」」

退屈な授業が終わりクラスのみんなは部活に行ったり帰ったり

「未来ー帰ろうぜ」

「おう」

オレの名前は白崎未来。高校2年生。ごくふつうの17歳だ。

「あいつの授業マジ退屈だよな。眠くなるっつーの」

「楽でいいじゃん」

「たしかに」

このお調子者の奴は幼なじみの空谷幸輔。お調子者だけど時には

真剣な一面を持っている。

「今日どつか遊びに行かねー？」

「悪い。今日はパス」

「えゝなんでだよ？」

「家の掃除があんだよ」

「あーそういえばお前んち神社だったな」

「じいちゃんにたのまれてんだよ」

話しながら帰路を歩いて角を曲がる。幸輔とはここで別れる。

「じゃあな未来。掃除頑張れよ」

「おう。サンキュー」

少し歩き家に着いた。

「ただいま」

「おう。帰ったか未来」

「さっさと掃除終わらそうぜ」

「そうじゃな」

二人で掃除をやる。一時間くらいたつと日は暮れ始めいる。

「こんなもんでいいだろ助かったぞ未来」

「そりゃ良かった」

「ほれ小遣いじゃ」

「マジ！サンキュー　じゃあコンビニ行ってくるわ」

じいちゃんから5千円貰いコンビニに行った。

ジュースと雑誌を買って

「家でゆっくり読もうと」

ウキウキ気分で歩いていると公園からボールを追いかけている男の子がいきなり出てきた。

「…なツ／あぶねー」

気がついたら体は勝手に動いていた。男の子を反対側に突き飛ばした。オレの目の前にはもう車が近いていた。

（あゝあもう死ぬのかオレ。短い人生だな。もっと生きたい。オレにはやりたい事いっぱいあるのに…。もっと幸せになりたかったな。…幸せ！？）

「いいか？未来。この首飾りはお前を幸せにしてくれるぞ」

オレは首飾りを握った。

「オレまだ死にたくない。もっと生きて幸せになりたいんだ！」

首飾りの白い石が突然白い光を放った。激しい光がオレ包み込んだ。

「な…なんだよ！？この光」　激しい光が消えるとその場にオレはいなかった。

第2話：出会い光

自分を取り巻く光が消え視界がはつきりしてくるとそこはさっきまでいた公園前の道ではなく雲の上にいた。

「な…なにがどうなってるんだ！？たしかオレは男の子を助けてそんでもって光に包まれて…。光が消えたら雲の上って…。やっぱオレ死んだのか？」

なにがどうなってるのかわからなくなり自分の顔を殴ってみる。

“ボンッ”

思いつき鈍い音と共に顔に痛みが走る。

「イテー！！痛みがあるってことはオレは死んでないのか？じゃあここはいつたい…」

すると突然、首飾りが妙な力で引つ張られオレはその勢いで飛ばされた。「ちょ…今度はなんだよ！？」

あまりの速さで飛ばされている中吹き飛ばされている方向にとってもキレイな“純白の城”が建っていた。

「なんだあの城は？雲の上なのに？」

遠くにあった城はもうオレの目の前にあった。

“キラーン”

首飾りの白い石が光った。

「入っていいのか？」

とても大きい扉をゆっくり開けてみる。

「これはいつたい？」

扉のそこには“白い結晶”が台の上に祭られていた。

「なんだこの結晶は？」

「それは“ホーリークリスタル”です。」

「えッ！？」

後ろからいきなり声が聞こえ振り向いてみるとそこにはとてもキレイな瞳をした。女の子がいた。

「き：君はいつたい？」

「私は“レイ”です」

レイとなる彼女は微笑みながら名を名乗った。「ここはいつたい何なんだ？」

「ここはあなたがしている首飾りの世界です」

「首飾りの世界？」

「あなたが車に引かれそうな時に私がここへ呼びました。」

「じゃああの時の光は君が」

「はい」

どうやらここは首飾りの世界らしい。

「ゴメン。わからない事が多すぎて。1から説明してくれないかな？」

「わかりました」

彼女は説明を始めた。

「この世界“ホーリーランド”は1000前、“ホーリーストーン”と、共に誕生しました。

あなたがしている首飾りの石です」

「これが“ホーリーストーン”」

「はい。恐らくあなたのご先祖様が拾ったのでしょう」

「じゃあ“ホーリーストーン”はこのモノなんだ。ゴメンね。これ返すよ」

「やっぱりあなたは私が思った通りの人ですね。返す必要はありません。」

「えでも」

「“ホーリーストーン”を落としたのは心正しき者に拾って貰うため」

「なんの為にそんなこと？」

彼女は一瞬下を見て再び話だした。

「この世界は純白の世界。いかなる事があっても汚してはならないのです。」

「そうなんだ。でもオレなんか来ちゃマズいんじゃない？」

「いえ。私はあなたが首飾りをしたときからずっとあなたを見てました。あなたの優しい心を身近で感じていました。それに先ほども」

「そっかぁ。ありがとう。そこまで言ってもらって彼女に微笑みかける。」

「あのそこでお願ひがあるんですけど…」

彼女は少し遠慮がちに言ってきた。

「いいよ。命助けてもらったし」

「あの私と一緒に旅に出てくれませんか？」

「えッ！旅？」

予想していなかった言葉に少し戸惑う。

「あの〜ダメ でしょうか？」

不安そうに彼女が聞いてきた。

「いいよ 学校とか退屈してたし」

「ホントですか！？」

彼女の笑顔をみてオレは少しドキッとした。

「でも休み続けるのはマズいかな〜」

「その事については大丈夫です。」

「えッどうして？」

「旅するのはパラレルワールドです。それにこの世界は時間がありません」

「そうなんだ。じゃあ大丈夫だ。ところで旅つてなにすんの？」

彼女は“ホーリークリスタル”のところまで歩み出した。

「ホントはこれ以外にもクリスタルはあるんです」

「えッ！」

「“ホーリークリスタル”を取り囲むカラークリスタルがあるんです」

「カラー クリスタル？」

「はい。全てを手に入れば虹の階段が出るのです」

「へえそれができれば何があるの？」

「それはまだわかりません。」

「そっか。でも旅していくうちにわかるよ」

「そうですね」

「これからよろしくレイ」

「はい。こちらこそ、未来さん」

彼女はとても笑顔だ。

「あゝ敬語はやめてよ。未来でいいよ」

「え ても」

「ほら言ってみて」

「ミ ライ」

「うん。ノー!!」

「あ!!ホーリーストーンが!!」

ホーリーストーンがいきなり黄色に光だした。

黄色い光はオレたち二人を包み込んだ。

「「わッ!!」」

光がやむとオレ達二人の姿はその場から消えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6648n/>

瞬間 パラレル

2010年11月2日02時11分発行